

王都に行けば、きっと人生が劇的に変わる。

そう信じていた。

田舎での生活は退屈だった。空は広く、蒼は美しい。平穩そのものだけれど、それが私にとっては退屈だった。毎日同じような風景、同じ顔ぶれ、同じ会話の繰り返し。家を出るたびに隣の家のおばさんが「まだ嫁に行かないの？」なんて言うのも聞き飽きた。そんな中、唯一私の心をときめかせてくれる話があった。

王都だ。

オシャレな町並みに活気のある市場はもちろん、道を行き交う多種多様な人々や、田舎では考えられない最先端の流行・文化が毎日を鮮やかに飾る！ それらすべてが、まるで宝石箱のように

美しく感じた。話を聞けば聞くほど、私はそれをどうしてもこの目で見たかった。いや、見るだけじゃない。そんな華やかな世界の中で、自分も新しい何かを掴みたかったのだ。

想いを形にするため、期待に胸を膨らませ荷物をまとめて王都へ飛び込んだ。きつと、あの場所でなら――、私の夢を叶えてくれる。……しかし、現実はそんなに甘くなかった。

「おい、姉ちゃん、こっちに酒がきてねえぞ！」

「はい、ただいまー！」

声を張り上げながら店内を駆け回る。両手には大きなジョッキとお皿が載ったトレイを抱え、お客さんたちの笑い声が飛び交う中、隙間を縫うようにテーブルへ向かう。忙しいなんてものじゃない、これはもう一つの戦場だ。ただ、これが今の私の日常なの

だ。

「すみません、注文いいですかー？」

「はい！」

ここは王都の下町にある居酒屋「天井の宴」。老舗というほど歴史があるわけじゃないけれど、夫婦で営むこの店は近隣ではちよつとした評判だ。

店主のトマスさんが作る料理は豪快でどこか家庭的。それでいて味付けが絶妙で、お客さんたちから大人気だ。奥さんのリーナさんも元気で気さくな人。どんな客でも笑顔で接し、テキパキと仕事をこなしている。また名物のお酒「発狂エール」は大人気で毎日飛ぶように売れる。おかげでこの店には常連客が多い。

そのため、夜の時間帯はとにかく大変なのだ。そこまで広くな

い居酒屋を目掛けて、お客さんらが波のように押し寄せてくる。しかも今日は、その波がいつもより激しい……！

「おまたせしました、熱いのでお氣をつけてどうぞ！」

トレイをテーブルに下ろしながら、笑顔でお客さんたちに声をかける。彼らは湯気の立つ料理を見るや顔を輝かせて嬉しそうな表情をしていて。そんな彼らの顔を見ると少しだけ疲れが薄れる氣がする。でも、直ぐに現実に戻されて、私は再び戦場へ戻るのだ。

「あっちのテーブル、後片付けしてないよ！」

「すみません！」

ふと思う。想像していた王都は、もっと違ったはずだった。

確かに王都にはきらびやかな町並みに活氣あふれる市場がある。

街路には美しく磨かれた石畳が敷かれ、様々な人々が行き交い、時折路地裏からは楽器の音や笑い声も聞こえてくる。

事実だ。そして私は、この場所に飛び込めば人生が変わると思っていた。夢に見たその光景に胸を膨らませて王都にやってきたのだ。しかし、当たり前だけど人生はそう簡単にいくものではない。「姉ちゃん、発狂エール2つ！」

「はい！」

私は名家の娘でもなければ、目を見張るような才能を持っているわけでもない。ただの田舎者に過ぎない。そんな私がこの煌めく世界の中で何かを掴もうとするには、あまりに無力だった。そんな誰でもわかるであろうことすら知らず、私はここへ来てしまった。王都は凡庸な人間を優しく迎え入れてはくれなかったのだ。

今思うと恥ずかしい限りである。街を歩き周囲を見渡せば、美しい服に身を包み鮮やかな羽飾りの帽子をかぶった貴婦人たちや、巧みに馬車を操る御者、弾ける笑顔で商売をする人々……。

皆が自分の役割を持ち、その場に溶け込んでいるように見えた。それに比べて私は何もかもが中途半端で、どこにも属せていないように感じた。最初は悔しくて泣きたくなることばかりだった。だからそんな現実を見返したくて必死に挑戦した。

貴族の従者は最初から門前払い、商人も知識や独自ノウハウなんてもってないから直ぐにクビ、女性限定で未経験者歓迎の求人、は水商売や犯罪に関与するものだった。危ない橋を渡りそうになりながらも、ギリギリのところまで回避して事なきを得たこともあって。そんな日はたくさん泣いて、なんとか次へ繋げようと奮起し

た。

でも、何度も挑戦して失敗するうちに気づいたのだ。私には特別な何かなんてない。ただの田舎者として、歯車の一部になる以外に道はないのだと。その現実を知るまでにそう時間はかからなかった。何も知らない田舎者特有の、妥当な末路だった。もはや涙も枯れていた。

しばらくして途方に暮れる。王都へ持ってきた所持金は残りほんの数枚の硬貨だけとなる。これが尽きたらもうどうしようもない。この広い王都の中で、私は行くあてもなくただ歩き続けた。ふらふらと彷徨いながら、ふと立ち止まった小さな店の扉に目を向ける。そこには、一枚の紙が貼られていた。

【急募】

その二文字が、ぼやけた頭の中にずとんと落ちた。

内容をよく見ると、居酒屋の店員を募集しているらしい。しかも食事つきで、さらには住まいとして二階の空き部屋も提供するという。——そんな好条件が目の前に記されていた。王都で劇的な人生を歩む夢はすっかり潰えてしまったけれど、これなら少なくとも生きていくことはできるかもしれない……！

私は店の扉を力強く押し開けた。

「お願いします、ここで働かせてください！」

※

そうして私は王都の居酒屋で働けるようになった。店主のトマ

スさんと、奥さんのリーナさんには感謝してもし足りない。必死に頭を下げて頼み込んだ私を快く引き受けてくれたのだから。王都で失敗続きの私ができることは、ただ全力で仕事に励むだけだった。

「ほら、早く皿を片付けろ！ お客さん待たせるな！」

「すみません！」

トマスさんの厳しい声が飛ぶたびに、私は慌てて手を動かす。トレイを抱えたまま狭い店内を駆け回り、料理を運び、空いた皿を下げ、注文を取る。そのどれもが凡才の私には難題だった。ミスをするたびに謝り、叱られ、反省して、それでも動きを止めることはできない。お客さんたちは美味しい料理を待っていて、私が止まれば店の流れが滞る。

夜が更け、店の片付けを終える頃には足は棒のようになり、手は痺れて力が入らなくなっている。提供していただいた二階の部屋にあるベッドに倒れ込むと、身体の疲れで頭はすぐに意識を放す。

夢を見る余裕なんてない、次の日も頑張る。それだけが私の日常になっていた。ただ、不思議と充実感もあった。こんな私でも必要としてもらえる場所がある。そう思うと、活力がみなぎるのだ。

毎日忙殺されながらも必死にしがみつき、あっという間に数カ月が経過した。居酒屋の仕事にもある程度慣れてきて、少しだけ心にも余裕が生まれるようにもなった。相変わらず忙しいけど、この生活がちよっとずつ楽しくなってきた。ただ、そんな生活の中

で、どうしても気にかかることが一つあった。

いや、正確には「一人」だ。

その人は数日に一度、決まって夕方の混雑する時間帯にふらりとやって来る。どの席に座るかはその日の気分次第のようで、カウンターに腰掛けることもあれば、誰かと相席になって楽しげに話し込むこともある。店主のトマスさんとも仲が良く、来店すれば軽い挨拶をいつもしていて。

「こんにちは、おやっさん」

「おっ、アスベルじゃないか！　いつもありがとうよ、発狂エールでいいよな！」

「もちろん」

彼の名前はアスベル・ライナー。

自らを劇団員だと名乗り、話し上手でいつも笑顔を絶やさない人だった。

その立ち居振る舞いは兄貴肌と言えばいいのか、誰にでも気さくで、別け隔てなく接しているように見える。店に来ては他の客と軽口を叩き、彼の周りには笑い声が絶えない。自然とその場にいる人たちを和ませる不思議な雰囲気を持っている。交友関係も広いらしく、アスベルさんが来ればいつも人が集まっていた。特に女性が多いだろうか。

まあそれも仕方のないことだ。理由は彼の容姿にある。アスベルさんを初めて見たとき、正直息を呑んだ。容姿端麗とは彼のために生まれた言葉だと思えたほどだ。

黄金のように輝く髪は、少しだけ無造作に揺れ柔らかな光を帯

びている。まるで一筋一筋が絹糸のように煌めき、その輝きは自然と目を引かずにはいられない。ブルーサファイアのような蒼瞳は深い海を思わせるような色合いで、じっと見つめられると吸い込まれてしまいそうなほどだ。視線が交わるたびに、不思議と心がざわめくような気持ちになる。

整った顔立ちに高い鼻、微笑みは柔らかくどこか余裕を感じさせる。軽い冗談を交えたときの口元の動きや目を細める仕草、手の動作に綺麗な瞳、そのどれもが色気となって相手の心を惑わせるのだ。

服装は比較的ラフな格好である。襟元がわずかに乱れ、胸元に少しだけ肌が覗いている。薄っすらと見える胸筋が魅惑的で、女性からすれば思わずそこに目が引き寄せられてしまう。袖を少し

捲った腕から見える筋肉のラインは力強さを感じさせ、ただそれを見せびらかすような押し付けがましきはない。その自然な色気が彼の魅力をより際立たせている。

ハッキリ言えばエッチなのだ。ずるい。

アスベルさん目当てに訪れる女性客も少なくない。彼らが金髪的美男子に向ける視線は、恋心や憧れの入り混じった熱っぽいものだ。対し、彼はそんな視線をもっともせず気軽に接している。普通ならおの熱視線に戸惑うものだと思うけど……。以前読んだ本に女慣れしている男は自信に満ちた顔をしていると書いてあったけど、なるほど確かに余裕のある佇まいだ。アスベルさんは誰に對しても平等に接しているように感じられた。

ただ、私の気のせいだろうか。彼の目はたまに……。ほんの一瞬

だけ私へと向けられることがある。目が合うと直ぐに逸らされてしまうので、正直よくわからない。

「田舎娘の私なんか一切興味ないだろうしね」

アスベルさんは上客だ。いつもお酒や料理を注文してくれて、他のお客さんたちと賑やかに談笑している。店にとってありがたい存在だし、確かに誰もが認める美男子だと思う。あの整った顔立ち、キラキラと輝く金髪、どこか余裕を感じさせる物腰。目を引かないわけがない。

ただ、私にとって彼は特別でもなんでもない。劇団員を名乗る彼と、平凡な居酒屋店員の私じゃ住む世界が違うのだ。彼には華があるけれど、私は地味な生活をしているだけの人間だ。私の仕事は料理を運んで注文を取ること。その繰り返しだ。だから、余

計なことを考える暇があったら、さっさと仕事に励むべきなのだ。
……と、考えるべきなんだけど。

何故か最近、アスベルさんが結構な頻度で話しかけてくるようになった。

「やあ、調子はどう？」

「ふ、普通です……」

「それは良かった」

何が良いのだろうか……？ 普通なんですけど、と考えてしま
う。

最初は軽い挨拶だと思っていた。お客さんから声をかけられる
こと自体、珍しいことじゃない。居酒屋は賑やかな場所だし、他
の常連さんたちも話しかけてくれることがある。だから、別段問

題にするようなことじゃないはずだった。

でも、アスベルさんの場合、ちよつと違うのだ。

確かに最初の頃は彼の視線はたまに一瞬だけ私へと向けられる程度だった。そして目が合うと直ぐに逸らされてしまう。その通りだ。でも、最近はこちらの様子をよく見ていて、私の手が空いた瞬間にさり気なく声をかけてくる。忙しそうにしている時には無理に呼び止めたりしないし、逆に余裕がある時には雑談を交えながら話しかけてくるのだ。その気配りの細やかさに感心する。

でも、正直困るのだ。問題は彼の存在感があまりにも大きすぎる。そして、そのせいで店へ彼目当てでやって来る女性客たちの視線が、ことさら私に向けられるのだ。

「ああ、今日も視線が刺さるなあ……」

内心そんなことを思いながら、アスベルさんの笑顔を見る。彼にとって私はただの店員。きつと深い意味なんてないのだろう。そう思っただけの日も仕事をこなした。

深夜、居酒屋の賑わいもようやく落ち着きを取り戻した。常連客たちが一人、また一人と帰り、最後の客が店を出ると、店内にはようやく静寂が訪れる。私はカウンターの上に並んだ空のグラスや皿を手際よく片付けながら、今日一日の喧騒を思い返していた。床を拭き、テーブルを整え、キッチンの片付けも終わると、最後に戸締まりを確認して私は二階へと向かった。

居酒屋の二階にある私の部屋は、広くはないけれど居心地がよい場所だ。壁には少し古びた絵がかかっていて、窓からは王都の

街灯りが見える。最初は仕事でミスをして怒られてばかりだったけど、トマスさんとリーナさんのおかげで少しずつ仕事を覚えることができた。また、ありがたいことに二人から信頼してもらえるようになり、今では片付けや戸締まりを一人で任されるようになった。素直に嬉しい。いつかは支店を出したいとご夫婦が言っていたので、もしかしたら支店長を任せてもらえるかも……。料理できないけど。そんな他愛ないことを考えながら部屋に戻り、疲労を感じながらベッドへダイブする。

「今日も疲れたあ……頑張ったあ」

ため息混じりの声が部屋に響く。シーツの柔らかさに体が沈み込むのを感じながら、大きくあくびをして天井を見上げた。部屋があるって嬉しい。

……王都に来てからどれくらい経っただろうか。ふと、そんな考えが頭をよぎる。

あの頃の私は、王都に来れば何かが変わると信じていた。田舎で過ごしていた退屈な日々から抜け出して、もっと自分らしく生きられる場所がここにあるはずだと。意気揚々と訪れるも、現実を知り途方に暮れる。そんな私を快く受け入れてくれたトマスさんとリーナさん。感謝しかない。

「二人ともお酒が好きだから、今度いいお酒を買ってプレゼントしよう」

そう呟きながら、同時にこうも思ったりする。

……何か大きなことを実現してみせると息巻いていたあの頃の自分は、もういないのだと。田舎の小娘が抱いていた哀れな夢は、

いとも簡単に崩れ去ったのだ。

このままでいいのだろうか。私は、この王都で何かを見つけ、それを実現するために来たんじゃないのか。散々現実に打ちのめされたのに、未練たらしくそう思ってしまう自分がいる。未来のことを考え始めると胸が少しだけ重たくなった。答えなんてどこにも見えなくて、ただ時間だけが過ぎていくような気がしてしまうのだ。

「贅沢な悩みだね。バチが当たりそう」

反省しながら視線をふと横に向けると、机の上に置かれたものが目に入った。

「手紙……？」

ベッドから起き上がり机へと近づく。自分宛の手紙や荷物は、

いつもリーナさんがこうして部屋に置いてくれるのだ。手紙を手に取り裏返す。瞬間、目を見開いた。手紙の送り主は……。

「……お父さん……!？」

胸がざわつく。ずっと連絡を取らずにいた父からの手紙に、不安と緊張が入り混じった感情が湧き上がる。緊急用として私の連絡先は一応伝えておいたのだ。だからここに来るのが当然だけど、今まで一度も手紙をよこさなかった父からのそれに心臓の音が大きくなる。変にドキドキしながら、事態を把握するため急ぎ開封し内容を読んだ。

「何かあったのかな……」

……それから、十数分が経過して。

蝋燭の炎が暗い部屋の中でゆらゆらと揺れている。机に肘をつきながら、その炎をぼんやりと見つめていた。隣には、先ほど何度も読み返した手紙が置かれていて。

「お母さんが……」

自然と声が漏れた。それはどこまでも重たく、深く沈んでいくようなため息と一緒にだった。手紙の内容は簡潔で、端的だった。

【仕事を辞めて、故郷に帰ってきなさい】

それが父の言葉だった。理由も書かれていた。母が足を怪我してしまい、思うように動けない状態が続いていること。父が一人で家事や農作業をこなすのは限界があること。そして、私が王都で頑張っていることはある程度理解しているけれど、家族の方も大事にしてほしい……というものだった。

私は唇を噛みしめた。父の言葉は正しい。きっと間違ひなんて一つもない。私が王都に行きたいと言ったとき、あの保守的で厳格な父が許してくれたのは奇跡に近かった。だからこそ、私は少しでも感謝を形にしようと、働いて得た少額のお金を仕送りしていた。けれど、それで全てを補えるわけではない。

帰省しなかったのも、何も成し遂げていない自分に負い目があったからだ。父もそれはわかっていて、何も言つてこなかったのだろう。それはわかつている。わかつているけど、私はまだ人生を自分の足で歩いていたかった。素敵な恋人と出会えたら二人で生きていけるかもしれないけど、生憎とそういう御縁はなかった。

……ああ、でも、今日のお客さんの中に女性二人組がいて、こんな会話をしてたっけ。

『最近いい出会いがないよねー』

『本当だよ。偶然でもいいからさ、王族と出会えないかな？』

『無理に決まってるじゃん。絵本の世界じゃあるまいし』

『まあねー。あ、でもさ、知ってる？ 王族の人って感情が高ぶると髪が光るんだって！』

『え、凄い！ 夜道便利じゃん！』

驚くポイントが違うと思った。まあそれでもだ、王族様と出会える確率なんて、それこそ万に一つもないだろう。白馬に乗った王子様の物語。今どき子供すら読まないものだ。おとぎ話の類であらうか。

おとぎ話……。田舎にいた時には、王都の話もまたおとぎ話に近いものだったかな。だからこそ私は、ここへ来たくて町を飛び

出した。窓の外に視線を向ける。夜の王都は静かで美しかった。遠くに見える街灯の灯りがぼんやりと浮かび、風に乗ってどこからか笑い声も聞こえてくる。同時に、お父さんとお母さんの姿も脳裏に浮かんた。

「一度、自分の気持ちを整理するのも大事だよね……」

思わずそう呟いていた。そしてコクリと頷く。結局、私は王都に来て何かを成し遂げることができたわけじゃない。ただ毎日を生きるだけで精一杯、胸を張れるような成果なんて何一つない。この生活にどれだけ意味があるのかわからないけれど、価値がないとは言わせない。きっと意味があつてここにいるんだと信じた

い。
だから、母のいない生活を父がどれだけ辛く感じているのか、

容易に想像できる。一人でも大変なのに、母を介護しながら働くのは大変だ。懸命に頑張る父を想像だけで胸が痛くなる。帰るべきなのだろう。潮時という言葉が頭をよぎる。いや、違うよ。まだ潮時なんかじゃない。自分の気持ちを改めて確認するために帰るんだ。また、短期間の帰省では意味がない。両親のことも考えて、荷物をまとめて帰るべきだ。つまり、王都での生活を諦める必要がある。……うん、我儘はそろそろ止めにしよう。

「皆、毎日を頑張ってるんだよね。なら私も自分と向き合わない
と」

自分自身を納得させるようにそう言った。けれど、心はまだついてこれない。未練は濃く残っている。窓から吹き込む夜風が蝋燭の炎を揺らしていて。それに合わせて私の心も、まだグラグラ

と揺れ続けていた。

※

翌朝、私は居酒屋のご夫婦に帰省の旨を伝えた。伝える前は胸が重たく、言葉が喉元で引っかかっていたけれど、一度口を開けば意外と素直に理由を話すことができた。

「母が怪我をしてしまって、父も一人では生活が大変みたいなんです。それで……荷物をまとめて帰ろうと思っています」

夫婦は驚いた様子で互いに顔を見合わせた。夫のトマスさんが「そりゃ大変だ」と呟き、妻のリーナさんも「早く帰ったほうがいいわよ」とすぐに続けた。おおよそ予想通りの言葉だったので、

私も用意しておいた言葉が続ける。

「でも、さすがにすぐに辞めて出発するのは失礼です。次の働き手が見つかるまで、働かせてください」「そんなことしてたらお母さんの具合がもっと悪くなっちゃうかもしれないわ」

「おうよ、お前はもう十分頑張ったんだ。恩返しだなんて気にする必要はねえよ」

二人の温かみに感謝しつつ、首を横に振る。

「今までお世話になった恩を、こんな形で無下にすることはできません。どうか……働かせてください！」

しばらくの押し問答の末、次の働き手が決まるまで働かせてもらえることで話は落ち着いた。夫婦には心配をかけてしまったけれど、これでよかったんだと自分に言い聞かせる。

その日から、私は働きながら荷造りを始めた。恩を返したい気持ちがあつたのは確かだ。でも、心のどこかではこうも思っていた。

もう少しだけ、ここにいたい。

未練がましいのはわかつている。王都で何も成し遂げられなかったのだから、ここに未練を抱く理由なんてないはずなのに。それでも、荷造りをしながらちらりと王都の景色を眺めると、やりきれない気持ちが湧いてくる。自分の情けなさに嫌気がさしながら、私は黙々と手を動かした。

そして二日後、驚くべきことに次の人がすんなりと決まった。

「もう……決まったんですか？」

その知らせを受けたとき、思わず声が上ずった。新しい働き手

のことを聞くと、王都の出身で料理経験があり、明るい人柄だという。きつとトマスさんとリーナさんが私を慮って早めに決めてくれたのだろう。想定していたよりもずっと早かった。……胸が締め付けられるような思いがした。

こうして、私にとって王都滞在の最後の日が決まった。また、最終日の前日、普段どおりに働くつもりでエプロンを手に取った私だったけれど、リーナさんがその手を優しく押し戻した。

「今日と明日くらい休みなさい。最後かもしれない王都を、ちゃんと見てきてごらん」

トマスさんも、いつものようにニヤリと笑いながら背中を軽く叩いてくる。

「俺たちのことなら心配するな」

断ろうとしたけれど、その目は真剣で、私が何を言っても無駄なのだとすぐに悟った。私は小さく頭を下げると、慣れた店の扉を押し開け、王都の街へと一步を踏み出した。ありがたいけど、悲しくもあった。「最後かもしれない王都」という言葉が心に重く押し掛かる。リーナさんに悪気はなかったのだろうが、いざ言われてみると辛かった。心の何処かで「両親が元氣になったらまた戻っておいで」と言っただけだった。

でも違うのだ。私の代わりはいくらでもいる。その現実を受け入れるが、今の私には難しかった。

最終日の前日は荷物まとめのチェックに追われた。意外と時間のかかる作業で、あつという間に一日は過ぎる。そして最終日、昼間の王都はいつものように賑やかだった。石畳を歩けば足元で

小さな陽だまりがちらついている。顔を上げると、青空を背景にした大聖堂の尖塔が一段と美しく目に映って。

いつも通りの市場を歩きながら、果物の屋台に足を止めリンゴを購入する。丸く赤いそれを頬張りながら歩くと、酸味と甘味がじわりと広がり、胸が少しだけ温かくなった。

それから、通りを抜けて少し離れた小高い丘に向かう。そこは王都を一望できる場所で、私がこっそりお気に入りにしていたところだ。何度も通ったはずなのに今日の景色は格別だった。暮れかけた陽が街全体をオレンジ色に染め、屋根の瓦や遠くの川がキラキラと輝いて見える。とても綺麗だった……。

景色をじっと見つめながら、これまでの生活を振り返る。苦難ばかりの毎日だったと思う。未来への期待に応えられなかった自

分が悔しくて、誰にも気づかれないうように小さく泣いた。

やがて日は沈み、夜の王都が灯火に包まれ始める。私は居酒屋へと足を向けた。最後の王都を歩き尽くした今、胸に広がるのは感謝と寂しさだった。店に戻ると、トマスさんとリーナさんが片付けを始めていて。

「一緒に片付けていいですか？」

そう言うのと、二人は顔を見合わせてから笑顔になって「もちろん」と言ってくれた。私はすぐにエプロンをつけ直し、慣れた手つきでテーブルを拭いたり、椅子を整えたりする。三人で片付けをして、これまでの日々の話に花が咲く。トマスさん曰く、最初は怒られてばかりだったけど、すぐに適応して感心したこと。またリーナさんから愛想よくてお客さんと上手く話してくれるし

助かっていたこと。ドンドンと出る二人からの感謝の言葉に、我慢していた涙はすぐに決壊した。リーナさんから優しく抱きしめられて、その日は涙と共に終わりとなった。

キツかったけど……楽しかった。明日の朝には王都を離れる。それがわかっていても、今はこの瞬間を大事にしたい。

全ての片付けとお別れの話が終わった頃には、時計の針は遅い時間を指していた。明日が早いことを考えて、私は「おやすみなさい」と告げて二階の部屋へ戻った。トマスさんとリーナさんは少し離れた家に住んでいて、二人も自宅へ戻っていった。

ここで過ごす最後の夜。部屋に入ると、窓から差し込む月明かりがやけに眩しく見えた。ベッドに横になったものの、全然眠れる気がしない。疲れているはずなのに、どうにも体が落ち着かな

い。目を閉じて明日ここを出ていくことばかり考えてしまつて、胸がざわざわする。変に緊張しているのか、それとも興奮しているのか、自分でもよくわからなかった。

「……眠れないや」

とうとう諦めて、スリッパを履いて部屋を出る。階段を下りて一階に向かうと、片付けられた居酒屋が暗闇の中に静かに佇んでいた。誰もいない店内。いつもは笑い声や活気のある声が飛び交い、料理の美味しそうな香りが漂っている空間なのに今は静けさだけが支配している。その空気が妙に落ち着くようで、逆に切なくもあつた。

カウンターの端にそつと手を置く。ここで何杯ものエールを注ぎ、何度も手を滑らせそうになつたつけ。慣れない頃はよく怒ら

れたなあ……。そのままテーブルを一つひとつ辿るように触れていく。あの席では常連のおじさんたちが賑やかに笑い合っていた。あの隅の席には若いカップルがよく来ていて、アダルト満載の恋愛話を耳にしてはドキドキしたつけ。あのテーブルでは、女性二人組みが王族の髪は感情が高ぶると光ると盛り上がっていた。

椅子やテーブルに触れるたびに、記憶が雪崩のように溢れてくる。王都に来てからの全てがまるで走馬灯のように頭の中を巡り始めた。慣れない仕事に四苦八苦した日々。お客さんに名前を覚えてもらって嬉しかった瞬間。失敗して落ち込んだ時にリーナさんに慰めてもらったこと。本当に色々あった。

「ああ……こんなにも素敵な思い出、あったんだね」

視界がぼやける。また涙だ。ご夫婦の前であれだけ泣いてしまっ

たのに、まだ出てくるとは自分でも驚きだ。頬を涙が伝っていく。それは溢れて止まらなかった。

「もう少し、ここで頑張ってたかな」

ぽつりと呟いたその瞬間、自分の本心に気づいてしまった。どれだけ辛くても、ここでの生活が嫌いじゃなかった。むしろ好きだったのだ。成長できる気がしたし、人と繋がる喜びを感じていた。なのに、それを捨てなければならぬ現実が、こんなにも悔しくて、辛いなんて。泣いてもどうにもならないのはわかっていく。それでも止められない涙が、私の中のもやもやした感情をぐちゃぐちゃに混ぜ合わせていた。

「ここにいたいよ……」

そんな時だった。

ガチャリと扉の音がした。

「んっ？」

呆然と扉の方を見つめる。店は閉めたはずだ。いや、閉めたと思っていた。でも、鍵を掛け忘れたのかもしれない。そんな自分の失態に気づいて焦るけれど、それ以上の衝撃的な光景が目飛び込んできた。

月明かりに照らされた金髪が揺れる。その髪を持つ人影が、ゆっくりと扉の向こうから現れた。そのシルエットの美しさに思わず息を呑む。その人は、私も知っている男性だった。

「アスベルさん……？」

驚きとともに彼の名前を呼ぶ。対し、相手はこちらを静かに見つめていて。

私の顔をまじまじと見ながら表情は固いけれど、口を少しだけ動かした。

「涙」

「……え？」

静まり返った店内に、アスベルさんの低い声が吸い込まれるように消えていく。

しばし呆然とし、私は自分の涙を慌てて拭いた。確かに涙を流していたので、それを他人に見られたのが恥ずかしかった。せつせと拭き改めて前を見ると、いつの間にかアスベルさんは店の入口から中へ移動していた。戸惑う私に対し、彼は淡々と言葉を紡ぐ。

「明日、帰郷するのか」

一瞬、頭が真っ白になった。なんで彼がそのことを知っているの？ 私が帰るなんて話、トマスさんとリーナさん以外は誰にも言っていないはずなのに。

「ど、どうして、それを……」

声が震える。疑問だらけで理解が追いつかない。アワアワする私とは対照的に、アスベルさんはいつもの軽やかさや優しさなんて微塵もなく真剣で、まるで逃がさないと云わんばかりに私を見据えていた。その視線を受けながら取り乱してはいけなないと自分に言い聞かせる。今日までは居酒屋の店員だ。愛想よくしないと、まだ落ち着きを取り戻せないながらも、なんとか言葉を作って相手に伝える。

「あ、あの、すみません。今日はもう店じまいなんです。それに

もう深夜ですし……お食事でしたら、ほかのお店を——」

「明日、本当に故郷へ帰るのか」

言葉は途中で遮られた。アスベルさんは同じ質問を今度はさらに低く深く、鋭く言い放つ。その声は有無を言わせない威圧感を含んでいて、心臓が一瞬止まりそうになる。喉の奥がぎゅっと詰まって言葉が出てこなくて、呆然と彼の顔を見つめるしかなかった。

深夜の静けさが余計にその言葉の重みを際立たせる。店内の明かりは消えている。窓から差し込む月明かりだけが、彼の金髪を美しく照らしている。

「な、なんでそんなこと……知ってるんですか？」

やっとのことで喉から絞り出すように言葉を出した。自分でも

驚くほど情けない声だった。しかし、彼は私の問いに答えない。ただじっと私を見つめている。サファイアブルーの瞳がとても綺麗だった。

本来ならその瞳に目を奪われるものの、「どうしよう」という言葉が頭の中で繰り返される。ただただ目の前の状況にどう対応していいのかわからず、私はその場に立ち尽くすしかなかった。アスベルさんの視線が、鋭く私を捉えて離さない。

そしてようやくここで、常識的な思考が事態に追いつく。きつとこれは、トマスさんとリーナさんが常連のお客さんたちに知らせてくれたおかげだろう。私が明日ここを出発することを、感謝の意味も込めてみんなに伝えてくれたのだ。優しい人たちだ。そういうところが、本当にこの居酒屋の温かさそのものなんだと思

う。

そしてアスベルさんもその一人だ。わざわざこんな時間に足を運んでくれるなんて、やっぱり優しい人だ。いつも店に来ると、美人のお客さんたちに囲まれているのにこんな私にも毎回話しかけてくれる。誰にでも平等に接してくれる兄貴分みたいなその性格は男女問わず人気である。

ただ、そうだとしてもこんな夜遅くに来られるなんて……不思議だ。もちろん嬉しいけど、申し訳なさも少しある。きつと彼は「お疲れ様」と言うために来てくれたのだ。少し照れくさくなりながら私は口を開いた。

「バレてしまつては仕方ないですね」

少し笑いながらそう言うも、アスベルさんは黙つたままだつた。

目の前で佇むその姿が、どうしてかいつもより近く感じて一瞬言葉が詰まる。けれどすぐに、何でもないような顔で続ける。

「仰る通りです。明日の朝に出発しようと思ひまして。短い間でしたが楽しかったです。アスベルさん、ありがとうございました」
深く頭を下げる。その間もずっと彼は何も言わなかった。ただ、じっと黙って私を見つめているのがわかる。視線の重さが痛いくらいに伝わってきて、少し居心地が悪くなる。さっきからどうして黙っているんだろう。何かを言いたいのか、それともただ私が話し終えるのを待っているのか。どちらにしても彼の沈黙は苦しかった。

頭を上げてアスベルさんはまだ何も言わない。海のような綺麗な瞳が私を見据えている。ど、どうしよう。これ以上話すもの

がない。何か言わなければと焦るけど、喉が詰まったように声が出ない。ただ唇をもごもごと動かすばかりで気まずさが増していく。その時、ようやくアスベルさんの口が開いてくれた。

「君は、母上が怪我をされたので帰るようにと父上から手紙がきた」

低音の声が静まり返った店内に染み渡る。

「は、はい。そうです」

ようやく言葉を返すことができた。アスベルさんが口を開いてくれたことに少しホッとする。安堵感からこちらとしても会話をするため口を開いた。

「両親を支えるためにも、一旦帰省して」

「——そこで断れない縁談を持ち込まれるとわかっているのに

か？」

鋭い言葉だった。有無を言わさぬ圧があり、彼の言葉が胸に突き刺さる。

その衝撃に思わず固まってしまった。

「え……？」

「ただの怪我なら荷物をまとめて帰省させようとは思はない。この時期ではよくある、縁談させるために帰省させる方便だ」

「そ、そんなこと……」

「既に調べさせた。君のご両親は今も元気に農作業をしておられる」

「……ッ」

頭が真っ白になった。耳に入った言葉が何を意味するのか一切

理解が追いつかない。

縁談？ 私の両親は今も元気？ どうして彼が私の事情をそこまで知っているの？ 縁談って何？ 私の両親が元気だというのはどういうこと？ そもそも、どうやって調べたの？ 一気に疑問が湧き上がり、胸がざわざわして呼吸が浅くなる。

「ど、どうして……」

ようやく絞り出した言葉も掠れてしまう。目の前の彼は一言も答えない。蒼の瞳だけが私を射抜くように見つめている。どこまでも深く底の知れない、吸い込まれそうなほどに恐ろしかった。同時、心の奥で小さな警鐘が鳴り始める。彼がここまで知っていることが異常だからだ。

なのに目を逸らせない。彼から向けられる圧に足が動かない。

店の中にいたアスベルさんはゆっくりとこちらに歩いてきて。一歩、また一歩、彼が近づくたびに心臓音は耳元で響くようだった。気づけば私は自然と後ろへと下がっていた。冷たい床にスリッパの擦れる感触がやけに鮮明で、怖さが増していく。

「あ、あの、えっと」

雲間から月が顔を出す。サッと店内に差し込む青白い光が彼の姿を浮かび上がらせた。やっぱり……息を呑むほど、美しい。思わずそう思ってしまった。でも、並行して背筋が凍るような恐ろしさも感じる。普段の彼は優しい常連さんで、居酒屋の誰に対しても分け隔てなく接する素敵な人だった。でも今、その姿はまるで違う。月明かりに照らされた彼の顔には、何か得体の知れない情念が宿っているように見える。そして彼の薄く開かれた唇が、

淡々と言葉を紡ぎ始めて。

「ようやくだ。ようやく『心から欲しいと思う女性』と出会えたんだ」

耳元で爆発するような音がした。それが私の心臓の音だと気づくのに、数秒かかった。

「……え、え？」

声が震える。自分の声なのに他人事のようだった。

「積み木を揃むように一つずつ丁寧に場を拵えていつてたのに……まさかの帰省だとはな。そんなことすれば、どこぞの知らぬ男に君を取られるだろう」

「な、なにを言って……」

言葉がうまく出てこない。混乱している頭の中で、何とか彼の